井沢実・大原美節・西向嘉昭編
「ラテン・アメリカ（地域研究講座・現代の世界8）」

ダイヤモンド社，1971年，IX＋596頁

中　川　和　彦

近時，ラテン・アメリカの研究を志す者が増加しているにもかかわらず，すぐれた手引きとなる書物がわが国になく，たずねられても，残念ながら，外国の書物をあげる他はなかった。こういうわけで，本書のような書物の刊行はわれわれが長い間渇望していたものであった。

本書はラテン・アメリカ研究者の分担執筆によるものであり，その内容も多岐にわたっており，法律の狭い領域のみを研究対象としている筆者にはとうてい本書を評する資格はない。しかし，編集者からこの書物を割当てられた以上，せめて，何んらかの希望を述べることをもって，その責を果したい。

本書はわれわれの前述の願望をみたすものであろうか。本書の狙いの1つは，ラテン・アメリカ研究の初心者にラテン・アメリカの全体像を認識させることにあるようだが，全巻を通読したところでは，りんかくをおぼろげながら，という感じである。全体像の認識とはもともと無理な注文であろう。ただ，希望を2つのべさせていただくと，外国資本の問題，米国との関係など，を独立の項目として取上げるべきではなかったろうか。また，いずれもが内容的にすぐれた論稿であるが，その中に，二，三，本書の目的にそぐわぬ，場違いの感じのものが見られるが，これは，編者の手で調整されるべきであったと思われる。

次に，本書のもう1つの狙いは，今後研究をおしすすめるための出発点とすることにあると思われる。この点につき，各章節毎に参考文献のリストがあるが，執筆者により，非常に差がある。たとえば，井沢氏のものは極めて詳細であり，非常に参考になるが，執筆者によっては，和書・概説書のみを列挙する。それでは，ものたりない。このような書物の場合，読者が研究をすすめるための参考文献をていねいにあげるべきであろう。この意味において，経済の章の文献リストも親切である。

この執筆者によるむらが気になったのは，歴史の箇所で，用語例の調整リストをつけておられ

ることで，これは，編者の方で，本文を訂正する方が読者に親切であったであろう。

ともあれ，今後，ラテン・アメリカ研究を志す者が，まず第1にひもどくべき書物の1冊であることは間違いない。